

北原白秋の小学唱歌批判と童心観：大正自由教育運動と山川草木悉皆成仏思想を中心に(国際日本学インスティテュート, 修士論文要旨(2005年度修了者))

| | |
|-----|---|
| 著者 | 竹村 忠孝 |
| 雑誌名 | 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies |
| 巻 | 56 |
| ページ | 269-269 |
| 発行年 | 2006-03-31 |
| URL | http://hdl.handle.net/10114/00020735 |

教育権回収運動期における関東州の中国人教育について

李 潤 沢

本論文は、1920年代中国の遼東半島南部地域、いわゆる「関東州」で起こった「教育権回収運動」を考察し、その間の日本植民地当局と中国側の活動と対抗を究明し、日本が行われた中国人を対象にする植民地教育の沿革、変化を分析することによって、関東州における「教育権回収運動」の全貌を明らかにしようとするものである。

第一次世界大戦後の中国各地で民族運動が高まった中で、1920年代に入ると、東三省に於ける日本の教育権の回収を目指す教育権回収運動が生じた。本論文では、教育権回収運動における関東州の中国人教育に焦点をあてつつ、当時の日本と中国の対抗の実相を考察する。具体的には、教育権回収運動に関わる関東州の政治的、歴史的な要素がいかなるものであるか、その影響を受けて関東州の中日双方の関係者たちはどのように反応し、日本の中国人教育の政策的変遷とどのような関係性を持っているのか、また、教育権回収運動期は関東州の植民地教育史の中でどのように位置づけられるか、という点について検証する。

まず、第一章では、教育権回収運動期までの関東州における日本の中国人教育について概説し、日本による中国植民地教育がいかにして始まったかを把握することで、その特徴及び性格を検討する。また、これらの中国人教育事業が植民地支配の中でどのような位置にあったのか、中国側のどのような影響を受け、どのような政策調整をしたかについて考察する。

次に、第二章は、中国側の近代教育活動の始まりと実態を検討する。1910年代末期に日本国内や中国側からの影響を受けつつ、植民地当局は政策調整を行っていた。同時に、日本の植民地教育に抵抗するため、中国側の民族教育も政治的、経済的、社会的契機によって誕生している。1910年代後半の日本による中国人教育はいわば転換期を迎えており、この時期の中国人教育活動のあり方が教育権回収運動の伏線となっていたのである。

そして、第三章では、教育権回収運動期における中国人教育について考察する。本章では、第二章で明らかとなった転換期の実相を土台にして、中国側が教育権回収運動を展開するに至った経緯とその意味を究明し、その影響を受けた関東州植民地当局の対応を明らかにすることを目的とする。

以上のような構成によって、従来の教育権回収運動に関する研究が見落としてきた、関東州における中国人教育の状況が明らかになり、関東州における植民地教育の実像の一端が示されることであろう。また、教育権回収運動研究、ひいては東三省の中国人教育の様相を考察するための新たな視座を提供することになりうるであろう。

「北原白秋の小学唱歌批判と童心観」

一大正自由教育運動と山川草木悉皆成仏思想を中心に

竹 村 忠 孝

本論は、大正期における北原白秋の唱歌批判を手がかりとして、北原白秋の思想を追究することを目的とする。

北原白秋は、わらべ唄や民謡を根底に童謡をつくった詩人である。北原白秋の作品が持つ文学性的特質を論じた研究や、短歌や詩文を論じた森羅万象の仏性・日本的幽玄美の研究、そして、大正から昭和にかけて自由教育に大きい役割を果たした北原白秋の研究は、多くの研究者により積み上げられている。その中で、大正期の自由教育運動で、白秋が展開した小学唱歌批判に着目し、それを支える白秋の思想を追究する。そこで、北原白秋の著書である童謡論集『緑の触角』における白秋の小学唱歌の批判・児童教育論をまず取り上げる。そして、それを大正期の小学教育と白秋の思潮の中に位置づけ、山川草木悉皆成仏思想を中心に、白秋の自然観・童心観の特質との関連を考察することで、白秋の思想の骨格を明確に示すを試みた。

本論は二章からなる。まず、第一章の第一節では、白秋の唱歌批判の要点を明確にするために、近代日本の学校教育制度から唱歌を類型化し、その中で古来武将の武勇を歌にした類の唱歌や、明治に入ってから武勇伝的なものを歌にした軍歌といった類の唱歌をあげ、童謡論集『緑の触角』による唱歌批判を明らかにする。第二節では、小学教育の中から時代背景として、白秋が唱歌批判した大正期に絞り、大正期の唱歌教育・修身教育・歴史教育による小学教育の教授法を示し、白秋の唱歌批判を発展させ、大正期の小学教育の指摘をする。第三節においては、第二節までの唱歌・小学教育の白秋の批判から、白秋が提唱した子どもの自由や個性を重視する自由教育運動の展開や、児童中心主義という新しい芸術教育運動の論を検討する。そして、白秋が目指している理想の児童教育の環境として、自然界に於けるあらゆる植物の現象を見ることが教育であり、自然観照的な教育に白秋の児童教育の本質があることを明らかにする。さらに、「詩の根本は子守唄であり、母親の慈悲と温情によって詩情は引き出される。」という白秋の自由教育の提唱の意義を確認し、白秋の児童教育の根本を明らかにする。

次に、第二章では、第一章において、白秋の教育観と自然が大きく関わっているという記述を受けて、第一節では、自然観照の正しさと物我一如との関連を述べている童謡論集『緑の触角』の仏教的な詩文から、三法印・般若心経の空の世界・物我一如の思想・無常光明の概観を中心に検討し、白秋の根幹に仏教的人生観があることを確認する。そして、白秋の詩集『水墨集』による東洋思想から滲み出る自然界と一体化の境地から、自然の実相と白秋の仏教的志向を確認する。第一節において、白秋の仏教的人生観には自然が大きく関わっていることが確認できたことにより、第二節では、白秋の詩文評論集『きよろろ鶯』や、樺太・北海道の旅で古代への郷愁を感じ書き記した、白秋の詩集『海豹と雲』の詩・評論を展開する。その中で、白秋の日本の仏教における山川草木悉皆成仏思想を中心に、日本古来の神道・縄文文化・天台本覚論からの汎神論的アニミズム・自然崇拜思想・東洋思想からみる生命観を考察し、白秋の自然観を追究する。また、白秋が仏教音楽協会に入り仏教唱歌をつくった根幹や生滅流転の理、輪廻あるいは循環の思想から白秋の自然観を追究する。

最後に、第二節までに追究し得られた論究に基づきつつ、第三節では、白秋の著作『洗心雑話』から、童心を深くした神仏仏心のあらはれである聖心こそ白秋の童心観であることを検討し、白秋の思想の骨格を明らかにする。